
わらべ歌

山桜 野亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わらべ歌

【コード】

N6082Z

【作者名】

山桜 野亜

【あらすじ】

凍える手を温めよう。

雪降る中に響く哀しきわらべ歌。

凍える手を温めよう

手のひら真っ赤になる前に

雪が降る中で、少女の声が歌う。

凍える手を温めよう

かかさん声を聞く前に

合わせて他の子供たちも歌う。雪遊びを満喫した子供たちの顔は
リンゴのように赤い。

凍える手を温めよう…

子どもたちは口をつぐんだ。自分たちの名を呼ぶ、母の声が耳に
届いたからだ。

満面の笑みで走りだす。幸せそうに。

これからも、その日常が続くと無邪気に信じ込んで。

凍える手を温めよう

手のひら真っ赤になる前に

雪が降る中で、少女の声が歌う。

凍える手を温めよう

かかさん声を聞く前に

少女の声以外に聞こえるものは何もない。少女と一緒に歌う子供たちも、声をかける親たちもいない。

凍える手を

ふと、少女の声途切れた。同時に、久方ぶりの音 人が雪を踏みしめ歩く音が聞こえた。しばらくして、音は途切れた。

「わらべ歌、か」

全てが白い雪の世界で、彼 若い男 は明らかに異質だった。髪も瞳も光一筋さえ届かぬ深淵の闇。その身を包む服でさえ、闇を切り取ったかのようなようだ。闇の中に今にも溶け込みそうな色の中で、唯一右手のグローブだけが血のように赤かった。

「いつまで歌い続けるつもりか？」

男は静かに問いかけた。

「それとも、歌うことしかできないのか？」

重ねた問いかけに答える気配はない。

凍える手を温めよう

ととさん帰ってくる前に

結局、少女の歌声が響くだけ。

この地方で歌われていた、古いわらべ歌。子供たちはこの歌を歌いながら遊び、狩りで生計を立てる父親が帰宅する前に、母親の元へ帰っている。家には、冷え切った体を温める火と、空っぽになった腹を満たす食事が待っている。そうやって生きていた。

「なぜそこまで？」

男は心底不思議そうに問いかけた。

「もう、その歌を知る者はいないのに」

ここは、北の国の、さらに北。巨大な山脈のふもとにあるその場

所は、一年の半分が雪に覆われる。ここで暮らすには、短い季節の間に、自然の恵みを蓄えなければならぬ。雪の王国と化した時はその蓄えを消費しながら家族で体を寄せ合ってじっと春を待つ。都では雪は物珍しい自然現象でも、この地の住民たちにとって、雪は全てを凍らせる無慈悲な神のような存在でもあったのだ。

男自身、この地で暮らしたことはない。しかし、足を踏み入れただけで、この土地で生きることがどれだけ難しいかを肌で感じていた。

「すでに全てが滅んだこの場所で　お前は一体何をしたいんだ？」

屋根に大きな穴が開いた藁吹き屋根。積雪によりつぶれた家屋。打ち捨てられた生活の道具。

はるか昔に、ここでの生活は失われていた。

「なぜそこまで固執するんだ？化け物」

男の正面にいるのは、明らかに人外のモノ。

優に二メートルはあるう大きな体。硬い毛におおわれた毛むくじやらの姿。一応、人らしい体格だが、やけに長い腕の先に鋭い爪が伸びていた。

何より異常なのは、その化け物が抱えているものだった。

それはとても小さかった。化け物が少し力を入れてしまえば粉々になってしまうほどに。それを化け物は大切そうに抱えている。

幼女の生首を。

まだ五つくらいだろうおかつぱ頭の少女は、瞳を閉ざしたまま口を開いた。

凍える手を温めよう……

化け物は少女の首を通して歌を歌っていた。おそらく、死の直前まで少女が歌い続けていたであろうわらべ歌を。まさか、自分が山の神と呼ばれる化け物に、食われるとは思ってもいかなかっただろう。その少女の顔に恐怖や絶望といった負の感情の色は見えなかった。どのみち、自分がすることは変わらないが。

「答えは、ないか」

化け物と意思疎通などできるはずがない。それでも、なぜか問いかけてみたくなったのだ。ほんの気まぐれのはずだったが、わかりきっていた状況に、失望も覚えていた。

「ならば」

男は血のように赤い右手をつきだす。手の形はまるで何かを握りしめているかのようだった。

「狩るまで」

一瞬だけ、男の瞳が真紅に染まった。瞳が元の色に戻った時にはすでに、右手に真紅の刃を持つ刀が握られていた。

「滅せよ」

人外の『ケモノ』、化け物の命を食らう刀は、歓喜の鏢なりを鳴らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6082z/>

わらべ歌

2011年12月21日00時49分発行